



3月1日 晴海地区に一般財団法人が運営する『下瀬美術館』が開館した。穏やかな瀬戸内海を望むことができる敷地に完成した、新たな文化芸術の拠点だ。この美術館は、その名のとおり下瀬家が長年にわたり収集してきた多くの美術工芸品を公開するための施設である。コレクションは、京都の大木平蔵のひな人形や、日本と西洋の近代絵画、フランスの工芸家エミール・ガレのガラス作品など多岐にわたっている。美術館のコンセプトは『アートの中でアートを観る』。展覧会だけでなく、その建築や庭園も大きな魅力の一つといえる。今回、オープンしたばかりの美術館に寄せる期待と魅力を探ってみた。

【3～10ページ 取材 企画財政課】

園芸絵本シリーズ寄贈 佐伯中央農業協同組合

2月20日に、全国共済農業協同組合連合会広島県本部の支援により、佐伯中央農業協同組合から、市内の小学校に、農文協の園芸絵本シリーズを寄贈していただきました。ありがとうございました。



森 智幸大竹支店長から絵本を受け取る大竹小学校兼田 等校長。

高齢者叙勲 旭日章光章

山本 隆康 さん(88歳 南栄3)



長年にわたり、市議会議員として地方自治の進展に貢献された功績

おわびと訂正

広報3月号(2ページ)のストーンアート完成の記事で、左の中学生の氏名に誤りがありました。正しくは次のとおりです。おわびして訂正します。
誤 中林 莉那 さん
正 中本 みひろ さん



交通栄誉章 緑十字銀章表彰

米田 吾郎さん

前列右から米田吾郎さん、功労を支えた妻の米田和江さん。後列右から秋本大竹警察署長、賀谷大竹交通安全協会会長。



1月18日、大竹交通安全協会理事米田吾郎さんが、長年、交通安全に関する各種活動に積極的に取り組み、広く交通安全意識の高揚に寄与した功績により、警察庁長官および全日本交通安全協会会長から表彰されました。

広報おおたけ④

CONTENTS

2023 APR. No.1269

“おおたけ”PRキャラクター コイちゃん

02 叙勲/おわびと訂正/寄贈/表彰

03 **アートがまちにやって来た。**
Welcome Art Museum

- 11 防災行政無線の戸別受信機を設置しませんか/広島県警察官募集
- 12 4月から税金などの納付がさらに便利に/令和5年度納期限
- 13 軽自動車税(種別割)のお知らせ/固定資産の縦覧・閲覧
- 14 高齢者肺炎球菌予防接種/成人男性向け風疹抗体検査・予防接種/新型コロナウイルス感染症のワクチン接種のお知らせ
- 16 子どもの予防接種
- 17 国保・後期人間ドック・脳ドック
- 18 よく噛める「8020」達成者募集/訪問歯科診療・口腔ケア/科学物質過敏症を知っていますか

- 19 認知症はよりオープンなものに『認知症カフェ』で語り合いませんか/大竹手すき和紙手描き鯉のぼり作り教室/
- 20 **KOIKOI**ジュニアリーダーズクラブ活動報告
- 21 善行児童・生徒表彰/防犯ブザーの寄贈/救済金のお願い
- 22 犬の登録と狂犬病予防注射
- 23 浄化槽の法定検査/おおたけ・ごみ事情
- 24 マイナンバーカード夜間・休日受け取り/迷惑電話防止機能が付いた電話機などの購入費を補助
- 25 消費者シリーズ/選挙に関するまめ知識
- 26 年金のはなし/福祉タクシー・バス利用券を交付
- 27 福祉のとびら/大竹市障がい者ふれあいスポーツ大会/手話奉仕員養成講座(基礎講座)
- 28 緑のカーテンコンクール参加者募集/上下水道料金改定
- 29 情報ステーション
- 34 カメラスケッチPART1 [大竹駅新駅舎・ひな流し]
- 36 カメラスケッチPART2 [小・中学校卒業式]
- 37 としょかんだより
- 38 5月の先取り情報ステーション
- 39 ボートレース宮島カレンダー/休日水道修理・使用開始/休日診療

40 はじめまして/環境学習集大成/



新型コロナウイルス感染拡大防止のため、掲載している催しなどは中止、または延期になる場合があります

誕生。文化芸術の拠点

—下瀬美術館オープニングセレモニー—



テープカットは、左から原研哉氏（デザイナー）、坂 茂氏（建築家）、田辺昌彦氏（広島県副知事）、斉藤鉄夫氏（国土交通大臣）、下瀬ゆみ子氏（館長）、入山欣郎市長、押味至一氏（広島建設会長）。

真っ青に晴れ渡った空も美術館の誕生を祝っているかのような2月26日。丸井産業株式会社（広島市西区）の創業者である下瀬家が収集した美術工芸品を公開する美術館のオープニングセレモニーが、3月1日の一般公開に先立って催された。



（左）設計の坂 茂氏と談笑する入山市長。
（右）フルートとハープの生演奏が流れる。

式典では、下瀬ゆみ子館長が「父母から受け継いだ、ひな人形やひな道具、佐伯祐三、加山又造、小磯良平らの日本絵画、ルオー、マティス、シャガールなどの西洋絵画、エミール・ガレの工芸品。多彩な作品をお楽しみいただければ幸いです」とあいさつをした。美術品の保存、公開などのため、平成30年に美術館設立に向け本格始動。この日を迎えることができ、下瀬館長の喜びもひとしおのようだった。

式典のクライマックスには、斉藤鉄夫国土交通大臣らによるテープカットが行われ、大竹市に新たに生まれた文化芸術の拠点が、華やかにスタートを切った。



エミール・ガレ
花瓶《フランスの薔薇》

下瀬コレクションの 多様性を見てください。

—谷藤副館長に聞く—

3月1日の開館から1週間。谷藤史彦副館長に感想や展示品の話を伺った。

—開館から1週間経ちました。今のお気持ちは—

平日で200人くらい、日曜日は500人くらいの方がお見えになりました。大竹市民の方もかなりいらしゃって良かったです。

—建設中から市民の方も楽しみにしていたようですから。

今回の開館記念展におけるひな人形が見事ですが、人形に對しての思いはどういったものがあつたのでしょうか—

下瀬家は関西に縁が深く、京都の丸平大木人形店の人形に憧れがあり、収集を始めたとのこと。

—この人形店というのは、どのようなものですか—

250年前から続く人形店で、関西では有名な老舗です。



（上）オープニングセレモニーで、作品の説明をする谷藤副館長。（下）収蔵作品のポストカード。

代々、大木平藏を襲名し、現在の当主は七世になります。明治以降、皇室や三井家、三菱の岩崎家にも納めていました。

—大きなひな壇の人形が目を引きます—

立ち姿のおひな様は全国でも珍しいようです。ひな壇の他は、展示ケースに並べ一点360度から見る事ができるようにしています。

—カラフルな外観の可動展示室も印象的です。展示の流れはどのように考えているのですか—

8つの可動展示室は、一つのテーマではなく、下瀬コレクションの多様な特色を見せるテーマを設定しています。

また、『エミール・ガレの庭』と名付けたガレの作品のモチーフになった草花が植栽された庭園を散策し、ひと息ついて、また展示品を鑑賞していただければと思います。

—今後の展示について、どのように考えていますか—

当面は下瀬コレクションを中心とした展示を考えています。その後は、コレクションをベースに、特別展を考えていきたいと思っています。



六世大木平藏製
《本狂 桃太郎 九寸》

開館記念展
『おひなさまと近代美術
—丸平の人形からガレ、マティスまで—
5月7日(日)まで
9時30分～17時（入館16時30分まで）月曜日休館
※5月1日(月)は開館

ミラーガラスの建築

下瀬美術館は、多彩なコレクションはもとより、建築も大きな魅力となっている。設計を手掛けたのは建築家の坂茂氏。世界を舞台に活躍する建築家で、2014年には、建築界のノーベル賞と称される『プリツカー賞』を受賞した。日本人では、丹下健三氏、安藤忠雄氏、磯崎新氏など、そうそうたる名前が受賞者に並ぶ。

美術館の敷地に入り、プロムナードの緩やかな坂を行くと、全面ミラーガラスに覆われた楕円形の建物が目に飛び込んできく。エントランス棟に足を踏み入れると、広々とした空間には、大樹が枝を広げるように見えるヒノキの集成材を使った柱と梁のデザインが印象的だ。そして、海に面した大きなガラス越しに、瀬戸内海の島々を望むことができる。

素晴らしい景観を再発見

晴海臨海公園に隣接する土地に建てられた美術館。この広大な敷地を生かすため、美術館に加えて庭園、レストラン、宿泊施設も併設したと坂氏は語っている。「美術館などの設計は、通常コンペ形式で行われることがほとんど。いろいろな建築家がいる中、選んでいただき、こんなにうれしいことはない。そしてこれだけの素晴らしい景観の場所に思う存分設計できるということはめったにないこと。非常にやりがいがありました」。そう坂氏は喜びの表情を見せる。

「瀬戸内沿岸に住んでいる方は、素晴らしい自然があるのに、意外と気づかない。ここに来ると自分たちは、こんなに素晴らしい景観の中にいるのだと再発見できると思う」。

私たちが日頃見慣れている海と島。しかしそれはかけがえのない財産であり、坂氏はそれを最大限に生かす施設にするため、ミラーガラスで建物自体の存在感を消して自然を主役に置くことを考えたという。エントランス棟から外に出ると、壁一面に正面の宮島が映し出されていた。

市民が誇りに思える場所に

水の上に浮かんでいるような、色とりどりの8つの箱型の可動展示室も象徴的な存在。

「この可動展示室も島々を見て発想した。瀬戸内海の自然がなければ、こういうデザインは生まれなかった。可動式の展示室は、世界でも例がないと思う」。

通常は固定してあるが、台船の技術を使い、水の浮力で建物を浮かして建物の配置を変えることができる。展示内容によってさまざまなレイアウトができ、リピーターにも新たな驚きを演出する仕掛けとなっている。夜にはライトアップされ、幻想的な雰囲気を出し出す展示室だ。

「ここが大竹市民の方が誇りに思えるところになればいいと思っています。来るとき乗ったタクシーの運転手さんもおく喜んでくれ、オープンしたら、観に来ると話していた」。その目を細める坂氏だった。

瀬戸内の海と島を生かしたデザイン

—建築家 坂茂氏の発想—

世界で活躍する建築家、坂茂氏が、広大な敷地に描いた建築デザイン。瀬戸内海の島々に着想を得た建築も大きな見どころだ。坂氏に美術館に寄せる思いを聞いてみた。



瀬戸内海の島々から着想した可動展示室。水盤と海とが一体となっているように見える。



ミラーガラスに覆われた楕円形のエントランス棟。周囲の景色を映すことで、建物の存在感を感じさせないように設計されている。



各所に置かれている坂氏デザインの椅子。紙管で作られている。

坂茂【ばん・しげる】

1957年東京都生まれ。1984年クーパー・ユニオン建築学部卒業（ニューヨーク）。1982-1983年磯崎新アトリエ勤務。1985年に坂茂建築設計を設立。1995年にNPO法人Voluntary Architects' Network (VAN) 設立。2014年にフランス芸術文化勲章、プリツカー賞、2017年に紫綬褒章など受賞。代表作は富士山世界遺産センター（2017）、ポンピドー・センター・メス（2010）、2023年より芝浦工業大学特別招聘教授。